

小学校低学年児童に対する体育指導の基本的課題の検討 ——主に健康状況、行動体力、活動意欲に着目して——

野田 洋平*・野田 文子**・萩原 順子***

（1986年9月27日受理）

A Study on Fundamental Subjects in Physical Education for Elementary School Pupils

Yohei NODA,* Fumiko NODA** and Junko HAGIWARA***

（Received September 27, 1986）

はじめに

児童の身体に関する調査報告は、最近数多く発表されている。本県関係では、著者らが「運動医事健康増進相談事業報告書（学校保健の手引第16集）」¹⁾を56年、57年、58年の三年継続研究として、58年3月に報告、60年3月には「子どもの健康」²⁾（昭和59年度、児童生徒の健康実態調査報告書）を、それぞれ、茨城県学校保健会、茨城県教育委員会から発刊した。両報告書の中では、体力、運動能力テストと健康状況、生活調査、栄養調査（食事調査）、発育状況、健康生活等の大項目に、30項目から50項目にわたる質問を用意した。

学校保健の手引第16集では、健康度（体格・体力・運動能力）判定、体力・体格・運動能力の分類、健康状況調査を更に実施した。そこから、児童・生徒の健康状況、生活状況及び食事について総合的な調査と体格・体力及び運動能力に関する基礎資料を得ることが目的とされた。調査結果は、相関分析され、本県内でも特に水戸市と大子地区を中心として、比較検討がなされ、校種別、性別、地域別に健康状況調査と体力、健康の相関関係が解析され、そこから、体力・健康を向上させるための提言として、(1)学校における改善条件、(2)学校でのチェック項目、(3)家庭における改善条件、(4)家庭でのチェック項目が提示された。

子どもの健康では、学校教育や家庭での改善への条件は提示されなかったものの、園児から高校生までを対象として、園児・児童生徒の発育状況、健康状況及び健康生活等の実態を把握し、学校保健行政上の基礎資料を得ることを意図して解析がなされた。園児・児童生徒の発育状況（身長・体重・胸囲・座高）、健康状況（疾病異常）、児童生徒の体力・運動能力、健康生活が平均値や偏差

* 茨城大学教育学部体育科運動学研究室

** 茨城女子短期大学保育科

*** 潮来町立潮来中学校

値による検討，相関分析（因子分析）による方法などで分析され，それぞれの項目の関係が明らかにされ，特に校種別，性別は勿論のこと，市町村別の地域特性が明らかにされ，学校保健指導の地域による差がこれからの指導に必要であることが示唆された。

本研究は，これらの研究成果と課題をふまえて，内山による「遊び・運動行動の成立要因・条件に関する概念図式」³⁾即ち，遊び・運動行動を説明するのに「生態学的枠組」から把握するモデルを考え方の基本とした。そのモデルは，「遊ぶ」「運動する」という行動を，④主体側の遊ぶ気持ち，意欲，信念，欲求，動機（各種遊びのヤル気のアル，ナシ），⑤遊ぶ能力・技能 ①精神的能力，②身体的能力・体力・運動能力・スキル（各種遊びのデキル，デキナイ），価値システムとしての③主体の心身・健康状態（遺伝的の先天的，時間的，生物学的特性，年齢，性別など）④環境としての①社会，文化，教育，経済的環境 ②自然的環境などの諸要因で構造している。

以上，四つの要因・条件をふまえ，今回は，①健康状況，②行動体力，③活動意欲の三つの大項目にまとめ，それぞれに50項目，39項目，37項目の計126の質問を用意した。

これらの調査結果を統計的に処理し，低学年児童の一般的な傾向と各項目の関連を検討し，低学年期の体育指導上の課題を構築する手掛りを得ることを研究の目的とする。

1 研究方法・対象・内容

1 質問紙調査

- 1) 回答選択質問紙調査 「はい」「ときどき」「いいえ」「わからない」の四つの回答を設け，それぞれに○印で回答する。
- 2) 調査対象 茨城県水戸市立小学校 M校 504名，1校 626名 MK校 279名の1年，2年，3年の母親 1,409名。
- 3) 調査実施 昭和59年9月
- 4) 調査内容

A票 健康状況 O・M・I健康調査を一般の人にわかりやすいようにアレンジし作成した。器官別に11に分類，50項目とした。①眼と耳 2項目 ②呼吸器系 5項目 ③心臓血管系 1項目 ④消化器系 9項目 ⑤筋肉・骨格系 2項目 ⑥皮膚 1項目 ⑦神経系 4項目 ⑧疲労度 3項目 ⑨全身症状 11項目 ⑩気質・精神 7項目 ⑪その他 5項目。

B票 行動体力調査 主体の①健康・体力 3項目 ②運動の実践 6項目 ③運動の持続力 5項目 ④技術の獲得 3項目 ⑤困難・失敗の克服 6項目 ⑥成功経験・成功感 2項目 ⑦行事への参加 1項目 ⑧運動の効果 3項目 ⑨その他 3項目，環境としての①運動のリーダー 1項目 ②運動の仲間 3項目 ③他との競争 1項目 ④家族との運動 1項目 ⑤家事作業 1項目 計39項目。

C票 活動意欲調査 主体の①運動への欲求 7項目 ②運動への期待 1項目 ③困難・失敗の克服への意欲 5項目 ④行動基準への達成意欲・闘争 3項目 ⑤運動の成功経験 1項目 ⑥運動・技能の表現 2項目 ⑦運動の学習 2項目 ⑧運動の創造性 1項目，⑨運動持続の経験 1項目 ⑩運動課題の遂行 8項目 ⑪行事への参加 1項目 ⑫その他 1

項目、環境としての①他者との競争 1項目 ②運動の仲間 1項目 ③承認 1項目 ④家族との運動 1項目の計37項目。

2 結果と考察

2-1 健康状況（A票）の結果と検討

集計は、A、B、C票の全てを学年別、性別に分けて実施し、分析している。

健康状況（A票）について男子では、1年から3年まで通して、同傾向の回答が見られた。即ち、母親からみた状況では、「治療していない虫歯」をもっている者が、約40%、「皮膚の病気にかかりやすい」「鼻づまり鼻みず、くしゃみがしやすい」などを訴えた者が26%~30%、「かぜをひきやすい」児童は、1年で24%あるものの2年、3年ではそれぞれ19%、17%とわずかに低下傾向を示している。その他各学年を通して10~15%の回答のあった項目は、「鼻血がしやすい」「勉強・運動にあきっぽい」「怒りやすい」「一寸したことをよく間違える」「やせすぎ」「太りすぎ」「昼より夜の方が頭がさえる」などであり、10人~6人に1人の母親が上記の症状をとらえていることになる。器官系統別に分類すると消化器系、気質・精神、皮膚、呼吸器系、全身病状、神経系に訴え数が多くみられることになる。また、「時々その症状がみられる」も含めると前記の項目は、40%から60%の母親が「はい」と答えていることになり、高い率で健康が危険になっている状況があると指摘できる。一方、正木⁴⁾らの指摘している「朝礼でパタン」などの立ちくらみの症状や「背すじがおかしい」「転んだとき手がでない」などの項目では、男子の場合、1年~3年を通して母親に認知されていない。否定的な回答が95%ある。しかし、「朝からあくび」を否定した母親は、いずれも55%程度、45%の母親がこの状態をみていることになる。

1年から3年までそれぞれ上位学年との頻度の差を検定した結果、1年と2年では、3項目、眼と耳、全身症状に差がみられ、母親が「わからない」と答えている傾向が、全身症状の項にあり、眼と耳の項目では、1年の方が「話しがきこえづらい」傾向が高いといえる。

2年と3年では、5項目に差がみられ、消化器系、全身症状、呼吸器系、神経系に含まれる。便秘傾向は2年が高く（19%）、頭痛（31%）も2年、肩や首すじのこり（9%）は3年、太りすぎ（14%）も3年がそれぞれ有意に高い傾向にある。

女子の一般的傾向をみると、目立った症状では、男子と同様に「治療していない虫歯」をもっている者が各学年とも40%、「皮膚の病気にかかりやすい」25%、「鼻みず、鼻づまり、くしゃみがしやすい」者は、時々出る者を含めると48%になる。この項目も1年から3年までかわっていない。「かぜをひきやすい」者も各学年平均的に、時々かぜをひく者も含めて約50%、2人に一人は、かぜを引いていることになる。気質・精神に分類した項目のうち、「運動や勉強にあきやすい」「怒りやすい」「一寸したことをよくまちがえる」の各項目では、時々そうであるという者を含めると、各学年大きな差はないものの約40%~50%の母親が答えている。この傾向は男子よりは低い傾向にあり、したがって男子の方が「あきやすく」「怒りやすく」「よくまちがえる」特徴をもつ。全身症状としての「やせすぎ」「太りすぎ」の傾向をもつ女子は、前者の方が3年間を通して高く（16%~

18%), 後者は学年進行とともに増加の傾向をもつ(1年8%, 2年12%, 3年14%)。この両項目は、男子に比べて高い傾向をもっている。「夜の方が頭のさえる」者も10%弱いて、学年進行とともに少しふえる傾向にある。

また、健康に自信のある者は、70%, 各学年を通して変化はない。しかし、わずかに男子の方が自信のある者が多い傾向にある。発生頻度は多くないと思われるが、「朝起きたときつかれている」「勉強や運動をするとひどくつかれる」「腹が痛む」「熱が出る」「下痢をする」「便秘をする」「頭が痛い」「朝からあくび」「朝起きたときさわやかでない」「朝起きたときに身体を動かしたくない」などの項では、「はい」と答えた母親は少ないものの「時々」を含めると30%~60%にも達し、潜在的な「健康の危険信号」が見える。前述した正木⁵⁾らの資料よりは、その出現率が低い。前記の項目は、各学年を通してほとんどかわらない率を示している。

1年と2年、2年と3年の学年差をみると、前者では3項目、後者では7項目に差がみられた。「話しがきこえずらい」とする者は1年よりは2年が少なく、3年で再び増えている(有意差あり)。「勉強・運動にあきやすい」のは1年生、同様に「怒りやすい」のも1年生の方が有意に高い。2年と3年では、「話しがきこえずらい」が3年の方に高く、「運動すると胸がドキドキ」する傾向は3年に多い。「運動をするとつかれる」のは3年であり、乗り物酔いも同傾向である。「一日中つかれている」者は3年に多く、「TVを夜おそくまでみる」者は2年に多い。「毎日おやつを食べる」者も2年に多い。「一日中からだがつかれている」者は、1年、2年の9%から、3年になると時々つかれる者も含めて16%にふえる。

各学年ごとに男女差をみると、「寝あせをかく」「鼻みず、鼻づまり、くしゃみをする」「あきっぽい」「怒りやすい」「夜の方が頭がさえる」の各項で男子が有意に高い。2年では6項目に差が認められ、「話しがきこえずらい」「ひどい寝汗」「スポーツでのケガ」「鼻みず、鼻づまり、くしゃみ」の各項で男子が有意に多く、「胸がドキドキ」「夢中にならない」者が男子に比して女子に多い。3年では、7項目に差がみられ、そのうち男子は「ひどい寝汗」「スポーツでのケガ」「鼻血がでやすい」の項目で有意に多く、「胸ドキドキ」「便秘」「胸が痛む」「乗り物酔い」の各項で女子が有意に多い。1年2年に比べて女子が高い率を示した項目が多くなっていることに注目したい。学年間で男女差が認められた器官系統は「呼吸器系」「気質・精神」「眼と耳」「心臓血管系」「その他」「消化器系」「神経系」「全身症状」などである。

2-2 行動体力(B票)の結果と検討

男子では、「スポーツ教室・スポーツ少年団に入っている」者は1年で22%, 学年が進むにつれて入会者が増加し、3年では39%の児童が参加し活動している。「体力のある」者は、1年で72%加齢とともに体力のない者がふえる傾向にある。同時に、わからないと回答している母親の率も10~12%を示し、子供の体力のあるなしの判断が出来ない母親が多いことがわかる。このことは、「獲得された技術」「行事への参加」「成功感・成功経験」「リーダー」「運動の持続力」「運動の実践」「困難・失敗の克服」「健康・体力・丈夫」などのカテゴリーの中にも数多くみられる。その中でも特に「難かしい運動の技を身につけるための努力」の項目は、1年、2年、3年を通して30%以上の母親が「わからない」と回答している。更に上記のカテゴリーは、2年、3年でも同種目、同

傾向のパーセンテージを示し、母親の子供を見る視点がかわっていないのではないかとの危惧を持たざるをえない。このことは母親が行動体力にかかわる現象面をとらえていないと推測できる。

行動体力についての顕著な傾向では、「外あそびに熱中できる」「外あそびは生活の一部」「からだを動かすことが好き」「うれしさの表現」「友達との外遊び」「運動することが好き」などの項目で1年では80～90%の回答をえている。2年になると上記の項目に「好きな外あそびをつかれてもつづける」「遊びをする友達がたくさんいる」が加えられ、運動行動と仲間の広がりが見られる。3年は2年と同傾向を示している。また、行動体力で問題になるだろうと思われる項目は、「成功経験・成功感」をもたない児童(41%)「学校で出来なかった運動を家ではやらない」児童48%、「スポーツ教室、スポーツ少年団に参加しない」児童78%、「運動会などで負けてくやしい思いをしたことのない」児童35%、「あそび・運動の技がおとる」児童28%、「むずかしい技を習得するのに努力をしない」児童33%、「得意な運動技能をもっていない」児童32%、「たくましくない」児童29%などが1年での著しい回答率を示している。2年、3年はパーセンテージが少し上下するものの同傾向と言ってもよい。また最近「全力を出さない」児童が多いと言われているが、本調査では「全力を出してやる遊び」をしない児童が1年で22%、2年で17%、3年で19%いて、5人に1人程度の子供達の遊びは、全力を出しきる遊びにはなっていないと思われる。問題になりそうな項目をカテゴリズすると、「技術の獲得」「行事への参加」「運動の成功感・成功経験」「他との競争」「困難・失敗の克服」「運動の実践」「健康・体力・丈夫」などになり、これらの能力・態度、実践力、意欲などが低いと推測できる。

項目間の学年差をみると、1年と2年では39項目中6項目に差がみられ、「負けてくやしい体験をしたことがある」「運動会などで良い成績をとったことがある」「体力や技術をのばす努力をする」「外での遊びは必ずする」「家で運動技術を練習する」「自分の能力をためす機会に積極的に参加する」の各項目がこれに当る。いずれも2年の方がパーセンテージが有意に高い。2年と3年ではわずかに2項目にだけ差がみとめられた。「外あそびを友達とする」「スポーツ教室・スポーツ少年団に参加している」の2項目であり、いずれも3年の方が有意に高い。

女子で「体力のある」児童は、1～3年まで65%、ない者が22%(1年)、17%(2年)、24%(3年)となっている。残りのパーセントは、わからないという回答であり、少なくとも10人に1人は子供の体力の程度をわからない母親がいることになる。各回答に肯定的な高い率を示した項目は、1年で「好きな外あそびをつかれていてもやる」(78%)、「外でのあそび・運動を友達と楽しくやっている」(75%)、「技が出来るようになったうれしさ表現する」(95%)、「運動することが好き」(78%)、「毎日身体を動かすことが好き」(89%)、「外あそびが生活の一部」(82%)、「外あそびに熱中する」(87%)、「外あそびをする友達はたくさんいる」(68%)、「毎日かかさず外あそびをする」(65%)、「得意なあそびや運動をもっている」(65%)などの項目である。2年では「負けてくやしい思いをしたことがある」(68%)を加えるだけである。3年で「運動会などで良い成績をとったことがある」(60%)が含まれる。60%以上の回答率を示し、行動体力にすぐれた指摘をしている反面、「全力を出してやる遊び」をやっていない児童が、1年で41%、2年、3年でそれぞれ35%、37%もいることに注目しなければいけない。全力でやっているかどうかの判定はこの学期期の児童ではむずかしいかもしれないが、一沫の危惧はある。その他では、「負けてくやしい思いをしたことがない」1年で37%、2年、3年でそれぞれ22%、15%と低下しており、スポ

ーツ経験に伴う低下傾向と思われる。「よくできる得意技がない」（3年まで約35%程度）、3年になっても、あそびの技能が仲々身につけていないことがわかる。1年のときと同じ率であることに疑問をもたざるを得ない。「たくましさ」のない児童が33%、33%、39%いて、3年でふえる傾向にみえる。20%の否定的な回答のあった項目を分類すると「健康・丈夫・体力」「技術の獲得」「行事への参加」「成功感・成功経験」「困難・失敗の克服」「リーダー」「他者との競争」「運動の実践力」「運動の仲間」になる。

女子に対する母親の「わからない」という回答では、子供の「困難・失敗の克服」「運動の実践力」「技術の獲得」「運動の仲間」「健康・丈夫・体力」「行動への参加」などに関する項目が多く、最も多い質問数を数えることができる。

項目間の学年差をみると、「行事への参加」「成功感・成功経験」に関する項目では、1年に比して2年の方が高い率を示すようになる。「技術の獲得」に関する項目では、1年より2年の方が「わからない」という回答が多い。また「少しくらい怪我をしても外あそびをする」という項目では、2年より1年の方が、外あそびをする傾向が高い。2年と3年を比較すると、回答率に有意差が認められた項目は3項目である。「運動の技術」をすぐれていると認めているのは、2年の母親の方が多く、3年では否定的な回答が36%にも達している。「運動を持続する力」に関しては、3年より2年の方に「わからない」と回答する母親が多く、「運動の爽快感」は3年の方が高いといえる。

学年ごとの男女の差を検討する。1年では、項目を分類すると有意な差が認められたものには、「運動の実践力」「成功感・成功経験」「困難・失敗の克服」「他者との競争」「家族との運動」「家事作業」「健康・丈夫・体力」「その他」に分けられる。その中でも「運動の実践力」「困難・失敗の克服」に関する項目では、男子をもつ母親の方が女子より高い回答率を示し、「家事作業」「健康・丈夫・体力」に関する項目では女子の方が有意に高い。しかし、「すぐうれしかったことの表現」では、女子の方がより高い率を示している。男・女どちらに「わからない」と回答した率が高いかと言うと、1年については、ほとんど有意な差はみとめられないが、「行事への参加」「技術の獲得」「困難・失敗の克服」の項目で男子の方に「わからない」が多く、「運動の実践力」「健康・丈夫・体力」で女子に高い傾向にある。

2年では、39項目中21項目に有意差がみられる。21項目のほとんどについて「はい」と答えている者が男子の方に高く、「汗をいっぱいかくまでの外でのあそび」「毎日の外でのあそび」「冒険的なあそび」「全力を出すあそび」「両親と一緒に運動」「運動の仲間」「衣服を汚すほどのあそび」などの項目が含まれる。したがって、男子の方がより活発な行動体力をもっていて、実践している姿が推測できる。しかし、「遊びが出来ないとイライラする」は女子の方が低く、「身体の調子のわるいときのあそび」は男子の方がやっている率が高い。

3年では、24項目に有意差がみとめられ、学年進行とともに差のみとめられる項目が多くなっていく。2年に比べて「つかれていてもあそびをつづける」「つかれる運動でもやりなさいといわれればがんばる」「体力・技術をのばす努力」「体育の時間に出来なかったことを帰宅後練習する」「毎日からだを動かすことが好き」「スポーツ少年団、スポーツ教室への参加」「たくましさがある」などの項目で男子が有意に高く、3年になるにつれて、「がんばり、克服、努力、参加、再練習」などの能力が顕在化してくることに注目すべきである。しかし、運動したあとの爽快感や家族との運動に男女差がなくなり、更に2年のときに、「いゝえ」の回答が少し多くなっていることも考えねばな

らない。

2-3 活動意欲（C票）の結果と検討

男子について：高い否定的な回答をえた項目（30%以上）は、「体力をつけるための運動をやりたい」1年で64%，2年57%，3年58%と高い否定的回答である。低学年では、その意欲は高くない。即ち、体力と運動や遊びとの認識が形成されているとは考えられないが、逆に26%～35%の児童は、そういう意欲を母親にみせていることになる。「運動で注目されたい」「スイミングスクールにいきたい」「自分の技を友達にみせたい」などの意欲に関する項目では、40%強の否定的な回答があり、1～3年を通じてその率はかわらない。5人に1人ぐらいの割合いで、否定的な回答の出た項目には「スポーツ選手として活躍したい」「健康のため毎日運動をする」「苦手な遊び・運動をやりとげる」「達成のむずかしい運動を一人でやる」「あそび方を両親にきく」「がんばりやさん」「運動や外あそびの相手をしてほしいと言う」があり、1年から3年までその回答率にはほとんど変化がみられない。しかし、1年、2年では5～6%だった否定的回答が、3年で27%にまでなった項目に「家に帰ると必ず外遊びや運動をしたい」がある。もっともっと遊びをしなくてはいけない年令、更により技能や体力がついてくる時期にこの否定的回答の高さの裏側を見直す必要がある。1～3年を通して70%以上の高い肯定的回答がみられた項目には、「3 Km ぐらいの距離を最後までがんばる」「出来なかった技ができるようになり両親に話す」「友達とあそびを考え出してあそぶ」「外あそびを2時間以上つづける」「がんばれば何とか出来そうな運動に挑戦する」「学校の体育行事に参加したい」「運動やあそびの相手をしてほしい」がある。運動の強さ、時間の条件を満し、挑戦や参加、がんばり、創意工夫に意欲のあらわれをくみとることができる。その中でも、3項目に1年と2年で有意差がみとめられ、「困難・失敗の克服」「成功感・成功経験」「運動課題の遂行・達成」の意欲が2年の方に高いことが判断できる。また、「わからない」が多い項目には、「運動への強い欲求」「運動課題の遂行・達成」「承認」などに関する項目があり、運動行動を起す基本的要因・条件の中の大切な部分が母親に認められていないのではないかと推測できよう。

学年間の有意性の検定の結果は、1年と2年の間に5項目の有意差がみとめられたが、2年と3年の間に差のみとめられた項目はない。1年と2年では、「体力をつけたいと思っている」「3 Km ぐらいの距離をがんばって走れる」「できなかった技が出来たときに両親に話す」「自分の好きな運動について両親に話しをきく」「がんばれば何とかできそうだと思う運動に挑戦する」の各項目に2年の方が有意に率が高い。これらは、「運動に対する強い欲求」「成功経験・成功感」「運動の学習意欲」「運動課題の遂行・達成の意欲」にカテゴライズされよう。

女子について：高い肯定的な回答をえた項目（70%以上）で、1～3年全てに高い率を示したものは、「できなかった技ができるようになって両親に話す」（97, 95, 94%）、「友達と一緒にいろいろな遊びを考え出してあそぶ」（83, 81, 77%）、「外での遊びや運動を2時間以上続ける」（79, 82, 75%）、「がんばればできそうな運動に挑戦する」（83, 85, 82%）、「学校での体育行事に積極的に参加する」（75, 76, 75%）、「友達と外での遊びをしたいと言う」（85, 86, 84%）、「運動や外での遊びの相手をしてほしいと言う」（79, 78, 79%）の各項目である。これらは、運動とか遊びを介在とした友達や両親とのコミュニケーションと自分みずからの強い意欲と意志を表現している項

目である。

否定的回答が高い率を示した項目（30%以上）は、「体力をつけるために運動やあそびをやると両親に言う」（69, 64, 59%）, 「運動で注目されたいと両親に話す」（56, 54, 52%）, 「将来スポーツ選手として活躍したい」（54, 56, 57%）, 「スポーツ教室, スイミングスクールに自分から行きたいと言う」（52, 42, 45%）, 「自分の技を友達にみせたい」（32, 38, 40%）, 「自分の健康のためにスポーツを毎日やりたい」（31, 30, 27%）などの各項があり, それらは, 自分で価値観をもって行動の規範とする行為である。これらの行為が1～3年できわめて低いことは, 具体的状況の奥にかくされている本質的關係を形式的に思考し, 操作する段階に達していないことを意味しよう。

「わからない」と高く回答された項目（20%以上）には, 「将来スポーツ選手として活躍したい」（36, 31, 30%）, 「自分の健康のため運動やスポーツを毎日やりたい」（36, 29, 24%）, 「学校での体育時間のある日はうきうきする」（24, 15, 11%）, 「体力があれば運動をやりたい」（22, 20, 15%）, 「3 Km ぐらいの距離を走ったり歩いたりするときがんばる」（21, 16, 16%）, 「冒険的な運動や遊びをしたい」（16, 19, 19%）, 「難しい運動や遊びの技を覚えようとしてできるまでやる」（19, 22, 19%）などがある。子供達が日頃努力している姿, やろうとする強い意欲, 将来の希望, 子供の喜びなど子供の子供らしい側面を母親がみえていないのではなかろうか。そして, これらのことを母親がみていることによって, 子供がその後の社会生活に必要な価値意識を身につけていく, このことをつみとっていないだろうか。

学年間の有意差の検定によれば, 1～2年の間に3項目の有意差がみとめられ, 2～3年間にはまったく差がない。差のみられた項目は, 「体力をつけたいと思っている」「遊びや運動のやり方を両親にきく」であり, いずれも, 2年の方に肯定的回答が有意に高い。また, 「冒険的な遊びや運動をしたい」については, 2年の方に否定的回答とわからないとする回答の率が高い。学年進行とともに活動に対する意欲が高揚されていく顕著な例はみられない。

2-4 健康状況と行動体力・活動意欲との関係の検討

健康状況（A票）と行動体力・活動意欲との関係を「自分の健康に自信がある」に「はい」と答えた者と「いいえ」と答えた者が健康状況, 行動体力, 活動意欲の各項でどのような差があるかを見ようとした。前者を「健康に自信のある群」（G群）, 後者を「健康に自信のない群」（P群）と呼ぶことにする。

1) G群とP群の健康状況に関する差の検討

男子について：差のみられた項目数は, 1年で20, 2年で20, 3年で19項目などである。1年では, 眼と耳, 呼吸器系, 心臓血管系, 筋肉・骨格系, 全身症状, 消化器系, 神経系, 気質・精神などの項目である。2年, 3年では更に疲労度が加えられる。本項では, 1～3年を通して, いずれの学年にも共通に差がみられる項目について主に記したい。

P群の男子は, G群に比べて「かぜをひきやすい」「時々ひく」も含めて, 1年から3年まで, 85, 85, 70%（P群）, 49, 44, 38%（G群）の率を示した。G群は学年進行とともに低下傾向をみせているが, P群は, 3年で15%低下, それでもG群の倍程度の高率である。P群に「かぜをひきやすい」傾向があると指摘できる。「少し運動をすると胸がドキドキする」では, 25, 15, 10%

(P群), 4, 2, 5% (G群)である。P群1年で4人に1人がドキドキ傾向, G群の5倍, しかし, 学年進行とともに低下する。G群では, 3年で5%と2年をわずかに上まわるのが気にかかるが, 運動の強さの条件を統制していないので確言はさけない。「身体の調子が悪く気分がすぐれないことがある」では, 60, 65, 70% (P群), 16, 19, 19% (G群)である。両群間には, 約3倍の開きがあり, わずかずつ高い率を示している。それらは全身症状に分類される項目であり, 両群間で差のみられた項目が1年目で21項目のうち5項目を占めていることから, P群に多い症状と言えよう。「顔色がわるいと言われたことがある」は, 45, 45, 40% (P群), 8, 8, 9% (G群)である。5倍程度の開きがあり, 「わからない」と答えている母親は, P群にもいない。「熱が出やすい」の項では, 90, 70, 67% (P群), 54, 51, 39% (G群)である。P群1年では, 10人中1人程度「熱が出やすくない」と答えているにすぎない。神経系の「頭が痛くなる時がある」では, 60, 65, 67% (P群), 21, 25, 29% (G群)である。両群ともにわずかずつ増加, かなりの子供達が頭が痛くなるという症状を経験していることになる。しかし, 「時々いたくなる」を含めないときには, G群の2, 1, 1%に比べて, P群は5, 10, 13%と学年が追うごとにかなりの増加傾向を示している。「一日中からだが疲れているようなことがある」は, 30, 30, 30 (P群), 9, 7, 8% (G群)である。疲労度を示す一つの指標とするとP群はG群に比べて3倍の疲労度の著しい児童を含んでいることになる。全身症状にしる, 疲労度にしる, 神経系の症状にしる相互にかなり関係の深い項目であるから, 子供の生活を見直す必要にせまられよう。その他, 1, 2, 3年の単学年で差がみとめられた項目, 1-2年とか2-3年など連続して二年間差がみられた項目, とびとびに差がみられた項目については, 詳細な検討はさけるが, 疲労度, 全身症状, 気質・精神に関わる項目がきわめて多いことは注目せねばならない。

女子について: 1年で13項目, 2年で20項目, 3年で32項目に有意差がみとめられた。学年進行に伴ない差のある項目が増加している点で男子とことなる回答率を示している。なお, 1~3年を通して共通に差のみられた項目は, 男子より少ない5項目である。それらは, 消化器系, 疲労度, 全身症状, 神経系に含まれる。1年では, 心臓血管系, 消化器系, 疲労度, 全身症状, 呼吸器系, 神経系にだけ含まれる項目に多いのに, 3年になるとあらゆる器官系統に項目が含まれ, なかでも, 気質・精神が3年でのみ差がみられることに注目したい。

個々の項目ごとにみると「食事がおいしく食べられない」が, 3, 3, 4% (G群), 10, 23, 10% (P群), 2年で4人に1人がおいしく食べられない傾向をもち, 文部省のスポーツテストの報告書⁶⁾にも, 小学校5・6年生が朝食の有無と体力, 運動能力の関係が顕著なことが報告されており, 体力・運動能力を高めるための一つの大切な条件と考えられるので, おいしく食べられる生活習慣の確立も必要である。「朝起きたときに疲れている」は, 25, 22, 33% (G群), 38, 53, 55% (P群)である。疲労度分類され, 健康に自信がある・なしによりこの程度の差がでる。P群では, 2人に1人の割合, そして, 3年が両群とも最高率を示している。「身体の調子が悪く気分がすぐれないことがある」は, 17, 16, 21% (G群), 47, 60, 76% (P群)である。G群に比べてP群の増加率が著しく, 3年では, 4倍近くの差がみられる。「顔色が悪いといわれたことがある」は, 9, 7, 10% (G群)に対して, 28, 40, 42% (P群)である。前項目と同じに, 全身症状をあらわす項目であり, これら両項は, G群とP群間に著しい差がある。また, この両項は男子と同様の共通項目であり, その回答率も同じようである。「頭が痛くなる時がある」は, 20, 27, 31% (G

群), 47, 60, 70%(P群)である。G群は男子と同傾向ながら, P群は, 2年から急激に上昇している。

共通に有意差のみられた項目は, 男子が8項目であったが女子では5項目であり, 男子との共通項目は, 3項目にすぎない。男女ともに3年で気質・精神に関する項目に有意差が多くみとめられるようになり, 女子では, とくに差のみとめられる項目が3年で顕著に多くなる傾向をみせている。

2) G群とP群の行動体力に関する差の検討

男子について: 39項目中1~3年で13, 28, 11項目に有意差がみられた。そのうち, 3学年にわたって共通の項目は8項目であり, それらは「健康・丈夫・体力」「運動の実践力」「運動の持続力」「技術の獲得」「他者との競争」「運動の効果(爽快感)」に含まれる項目である。

「体力がある」は, 82, 82, 80%(G群), 35, 30, 47%(P群)である。健康であるなしが, 体力に著しい影響をもつことがここから予想される。また, 「わからない」と回答した母親が, 両群ともに10%程度いることになり, 自分の子供の体力を知ることの必要性を言われながら, その域に達していないことは残念である。「汗をいっぱいかくまで外あそびや運動をする」は, 「はい」と答えた者が, 56, 54, 58%(G群), 35, 25, 30%(P群)いる。さすがに「時々する」を含めると100%に近く, 否定的な回答はほとんど目につかない。「外あそびや運動をしてもつかれることはない」に, 「はい」と答えた者が, 56, 50, 49%(G群), 20, 20, 30%(P群)である。この項は, 前項と同じく否定回答, 不明回答をした者はいない。「外あそびや運動の技はすぐれている」では, 否定的回答が, 19, 18, 18%(G群), 55, 45, 40%(P群)である。この項では, 前項より, 「わからない」の不明回答が多くなっており, 1年では, 15%にも達している。疲れているかどうかは, わかるにしてもその活動の中味, 即ち質までは, 見届けられていないと言える。「外での遊びや運動をやり抜く体力は友達よりすぐれている」に, 「はい」と答えた母親が, 80, 86, 90%(G群), 65, 65, 80%(P群)である。他の項目ほどの差はないが, 「わからない」と答えた者が, G群ゼロに対し, P群には5~10%いることが特徴である。「全力を出してやる遊びや運動をしている」は, 否定的回答をしている母親が, 19, 11, 14%(G群)に比べ45, 50, 27%(P群)であり, P群は3年で減少している。しかし, 「わからない」との回答は逆に10%増えている。「運動したあとのさわやか感」では, 「はい」の回答が, 64, 65, 70%(G群), 45, 50, 40%(P群)である。この項は, 運動の質をコントロールしていないので明言出来ないが, 健康に自信のない群は, 運動後の爽快感を得る機会が少ないと思われる。「たくましさがある」の項では, 60, 62, 69%(G群), 20, 25, 40%(P群)である。健康への自信が, たくましさをうつす一つの指標ともなりうる事が推測できる。P群では, 否定的な回答が3年で47%に達し, それでも1年の70%からみると著しい改善といえる。

女子について: 39項目中1~3年では, 4, 9, 21項目と倍々の勢いで有意差のみられる項目が増加している。しかし, それは, 男子にくらべて少なく, したがって1年から3年まで, 共通に差のみられた項目は3項目にすぎない。「健康・丈夫・体力」「運動の持続力」に含まれるものである。個々にみると, 「体力がある」は, G群で77, 78, 80%, P群で34, 33, 21%である。この項は, 男子と共通であるが, G群でも男子の回答率より低く, P群も3年の21%は, 男子の半分にしすぎない。また, P群では, 「わからない」と答えた者が, 2年で20%にも達している。「好きな外での遊びや運動なら疲れても最後までつづける」の項では, G群が83, 77, 85%, P群66, 60,

61%である。特に「わからない」とする回答がP群で、28, 17, 18%と高いのも特徴である。この項は、男子にはみられない。「外あそびや運動をやり抜く体力は友達よりすぐれている」では、G群の否定的回答が4, 4, 5%, P群では、22, 23, 24%である。男子とも共通の項目であり、男子では、「はい」と回答した母親がG群で80%程度、P群でも65%以上いるにもかかわらず女子では、G群でさえ、15, 10, 17%, P群では、0, 7, 3%にすぎない。男子に比べて、著しい低率と言わなければならない。

結局、女子については、この3項目にのみ共通性がみられたが、男子に比べて、著しい低率であることに留意しなければならない。

3) G群とP群の活動意欲に関する差の検討

男子について：37項目中1年で7項目、2年で16項目、3年で5項目に有意差がみとめられた。しかし、3学年に共通な項目は一つも存在しない。前述したように2年で16項目とふえ、3年間を通してその法則性はみとめられなかった。また、1年と2年、2年と3年というような連続性もわずかに3項目であり、1・2年の間にしかない。1, 2年で特に増えた項目としては、「運動の課題の遂行・達成」に含まれる項目が多く、全体的にも、「自分で立てた行動基準の達成」「困難・失敗の克服」「運動技術を表現」などに含まれる項目は少ない。

女子について：女子も男子同様、学年を通して有意差のみられた項目は一項もない。差のみられた項目は、8, 9, 15項目であり、女子に関してもG群・P群即ち「健康に自信がある、ない」という分類では、項目間の共通に有意差のみとめられる項目がないと言える。男子と同じに「運動技術を表現」、具体的には「冒険的な遊びや運動をしたい」にまったく両群間に差がみとめられず、「困難・失敗の克服」についても差のみられた項目は少ない。

強いていえば、男女ともに健康の自信と活動意欲の良否に3学年共通の項目が見出せないといえる。

2-5 行動体力と健康状況、活動意欲との関係の検討

行動体力の項目の中で、「体力がある」と答えた者と「体力がない」と答えた者をG群、P群とし、行動体力、健康状況、活動意欲の各項目にどのような有意差がみとめられるか検定し、3年間に共通の項目の検討をする。

1) G群とP群の健康状況に関する差の検討

男子女子に共通な項目について：男女共通に有意差のみられた項目は4項目である。「かぜをひきやすい」では、G群(男20, 14, 17%, 女13, 8, 15%), P群(男55, 43, 25%, 女40, 49, 40%)である。各群での男女差はみとめられない。P群男では、3年でかなりの減少、女では、その回答率はわからない。体力のある者は、男女共にかぜをひきづらい。「自分の健康に自信がある」は、G群(男81, 85, 84%, 女81, 83, 87%), P群(男36, 43, 42%, 女47, 39, 32%)である。G群は、その回答率が高く、しかも、男女差はない。P群はG群の2分の1に近い。この項は、G群で「わからない」と回答する母親は、P群の3分の1程度であり、ちなみに、P群1年男では、29%がわからないと答えている。「身体の調子がわるく気分がすぐれないことがある」では、G群(男81, 80, 73%, 女80, 82, 74%), P群(男48, 40, 58%, 女60, 59, 44%)が、気分がすぐ

れないに「いいえ」の回答をしている。G群では、男女差はなく、身体の調子のよい者が8割にも達しているが、P群では、身体の調子の良いものが、G群に比して少ないといえる。「やせすぎている」には、G群（男7, 12, 6%, 女8, 10, 8%）、P群（男39, 34, 33%, 女42, 37, 36%）であり、G群、P群ともに男女差はみとめられないが、P群はG群の3～4倍の回答率を示した。体力のない者に「やせすぎ」の傾向がみられる。

男子にだけ差のみられた項目には、「熱がでる」「骨折しやすい」「勉強や運動にあきっぽい」の三項目がある。前者では、否定的回答が、45, 49, 57%（G群）、19, 23, 35%（P群）である。即ち、「熱が時々でる」者まで含めてP群は、G群の約2倍、体力のないものは、熱が出やすい傾向にある。「骨折しやすい」では、P群に「わからない」と回答した者が多く、1年男では26%もいる。この項は実際に骨折したかどうかの設問ではないので、骨折しやすいのではないかという予測だけであり、P群にその危険感がG群より高いと考えたい。「運動・勉強にあきっぽい」では、「時々あきっぽい」を含めて、G群（49, 52, 53%）、P群（74, 69, 73%）である。体力のあるかないかが、集中力にかなりの影響のあることがうかがえる。

女子に有意差がみとめられた項目には、「勉強や運動をするとすぐくつかれる」G群（16, 19, 18%）、P群（38, 54, 51%）、「顔色がわるいといわれる」G群（3, 8, 11%）、P群（33, 34, 29%）、「朝起きたとき身体をうごかしたい」G群（58, 47, 56%）、P群（29, 20, 35%）である。いずれもG群がP群より健康状況にすぐれ、つかれずらいからだ、よい顔色、身体をうごかしたい意欲をつよくもっていると思われる。

2) G群とP群の行動体力に関する差の検討

男女共通に有意差のみられた項目は、14項目にも達している。それらの項目は、「外での遊びや運動の技がすぐれている」「運動会や競技会で良い成績をとったことがある」「外あそびや運動をするときのリーダー」「得意なあそびや運動がある」「好きな運動や外あそびをつかれていてもつづけられる」「外での遊びや運動を友達と楽しくやる」「全力を出してやるあそびや運動をする」「むずかしい技を身につけるために努力する」「静かにしているより運動することが好き」「運動後さわやかな感じになる」「よくできる得意技がある」「たくましさがある」などの各項目である。体力があると、前記の項目では、ない者に比べて著しい差がみとめられる。これらは、カテゴライズされた行動体力のすべての領域に含まれ、楽しく運動をすることから、リーダーとしての資質、たくましさ、成功経験、秀れた技の獲得、運動後の爽快感をうるに至るまでの大きな要因が体力であることを意味しよう。

男子には、この他12項目に有意差がみとめられている。そのうちの11項目には、「毎日かかさず外あそびをする」「汗をいっぱいかくまで外あそびや運動をする」「運動会などで負けてくやしい思いをしたことがある」「外あそびや運動をやり抜く体力は友達よりすぐれている」「体力や技をのびたいと努力している」「調子がわるくても外あそびや運動をする」「能力や技をためす機会があれば参加する」「毎日からだを動かすことが好き」「外あそびや運動は毎日の生活の一部」「外あそびや運動に熱中できる」「毎日衣服を汚すほどあそびや運動をする」などがあり、女子の一部の学年とも整合している。しかし、「体力をもてあましている」の項目は、女子には、どの学年にも有意差がみられず、今回男子にのみ差のみられた項目である。

女子には、「外あそびや運動をしてもつかれることはない」「家で両親や兄弟と一緒によく運動

をする」の二項目が加えられる。女子には、後者の項目がG群で20%、P群では5%程度であり、体力のある子供が両親兄弟と一緒に遊ぶための要因になるのではないかとと思われる。

3) G群とP群の活動意欲に関する差の検討

男子女子に共通に3学年を通じて有意差のみとめられた項目は、「自分に苦手な外あそびや運動をやりとげる」「難かしい運動や遊びの技を覚えるまでやる」「がんばれば何とかできそうな運動に挑戦する」「目標を達成するまでがんばる」の4項目である。挑戦・達成・持続などの意欲が体力のある者に備わっていることがうかがわれる。男子では、その他9項目にG・P群間に有意差がみられた。「将来スポーツマンとして活躍したい」「体育の時間のある日はうきうきしている」「運動が出来なくなったときに立ち直ろうとする」「なかなか出来ない運動を一人で努力する」「冒険的なあそびや運動をしたい」「あそびや運動で困難にぶつかってもくじけずやる」「積極的に外あそびや運動をする」「体育行事に積極的に参加する」の9項目である。男女共通の項目にくらべ、いかにも男子らしい逞しさがみられる。なかでも、体育の時間への期待、行事への参加が学校体育と体力のある、なしが直接かかっている点に注目したい。それと同時に、体力のない者もこの両項目については、高い率であってほしいと思う。体力のない男子では、45、29、20%が心がうきうきしないと回答している。母親の回答であるため、事実の検討は後日すべきと考えている。女子では、男子女子共通に差がみられた項目以外に、有意差のみとめられた項目はない。

2-6 活動意欲と健康状況・行動体力との関係の検討

本項では、「体力をつけたいと強く思っている」(G群)と「思わない」(P群)が活動意欲、健康状況、行動体力の各項でどのような差があるだろうかを見ようとする。P群が学年差を検討するには少数なので、男女差のみで検討する。

1) G群とP群の健康状況に関する差の検討

50項目中5項目にのみ有意差がみとめられた(男子)。女子では、3項目であり、男子女子に共通に有意差がみとめられたのは、「勉強・運動に夢中になる」G群(男65、女55%)、P群(男41、女25%)である。男子だけは、「食事の前に空腹である」G群88、P群73%、「運動・勉強にあきやすい」G群11、P群29%、「朝起きたときからだを動かしたいと思わない」G群29、P群55%、「毎日自分一人で起きない」G群25、P群50%の各項である。この項の中からは、体力をつけたいと思う意欲と子供の生活習慣の関連が推測される。本県の児童(高学年)では、男子は、生活習慣の良い者が、垂直とび、立位体前屈、女子では、垂直跳、立位体前屈、背筋力、50M走、走り幅とびに関係が深いことが報告⁷⁾されている。

女子にだけみとめられた項目は、「ひどいね汗をかく」「時々かく」を含めて、G群16、P群25%、「やせすぎ」G群26、P群13%である。大きい差ではないが、男子とはことなつた傾向をみせている。

2) G群とP群の行動体力に関する差の検討

健康状況との関係では、きわめて少ない項目にのみ有意差がみとめられたが、この行動体力の項目では、男女両群に共通に差のみられた項目は10項目あり、「運動会などで負けてくやしい思いをしたことがある」「冒険的なあそびをする」「全力を出してやる運動やあそびをする」「体力や技を

のばしたいと努力する」「体育の時間にできなかった運動を家で練習する」「難しい運動の技を身につけるために努力する」「能力や技を試す機会があれば積極的に参加する」「運動のあとにさわやか感がある」「運動をすると気持ちがいい」「よく出来る得意技をもっている」などである。体力をつけたいという強い意欲をもつ者は、この意欲が、困難・失敗の克服、全力の集中、努力、積極性、爽快感、冒険などをひき起す要因となっている。

男子では、その他に「運動の実践力」「リーダー」「技術の獲得」「運動の持続力」「健康・丈夫・体力」などの領域に属する項目がある。女子では、「運動の実践力」「運動の持続力」「成功感・成功経験」の領域から各一項目ずつ差のある項目が見出される。男子の方が差のある項目が多いといえる。

3) G群とP群の活動意欲に関する差の検討

男子・女子に共通に有意差のみとめられる項目は、21項目ある。項目数が多いので詳細に記述することはさけるが、全ての領域に含まれ、「体力をつけたいと強く思っている」者は、活動意欲関連の項目とは、深い関わり合いがあると推測できる。男子は36項中30に、女子は22項目あり、より男子の方に関係が高そうである。

4) 運動やスポーツをやってみたいと思っている者（G群）と思わない者（P群）の比較

G群とP群の二群に分けて、健康状況、行動体力、活動意欲の各項目にどのような差があるかを見た。その結果、活動意欲の多くの項目にG・P間に差がみとめられた。但し、男子では、「3Kmぐらいの距離を走ったり歩いたりするときがんばる」「どうしても出来なかった技が出来るようになって両親に話す」の二項目には、差がみとめられなかった。また、女子では、後者の項目にだけ差がない。強い活動意欲は、他の意欲、克服、努力、達成、参加の強い欲求に関連が深い。

健康状況との関係を見ると、男子が11項目、女子が7項目に差がみとめられる。男子・女子の両群に差のみとめられた項目は、「肩や首すじのこり」「勉強・運動に夢中になる」「勉強・運動にあきやすくない」「一寸したことを間違えない」「朝おきたときからだを動かしたい」の5項目である。なかでも「夢中になる」G群73、P群23%（男）、G群64、P群17%（女）、「あきやすくない」G群50、P群18%（男）、G群63、P群33%（女）になる。この両項は、背腹の関係に近いもの必ずしも率は一致していない。

行動体力との関係を見ると、男子は39項目中3項目に、女子は6項目に有意差はみとめられない。大部分に有意差があり、「運動やスポーツをやってみたいと思っている」G群がP群に大きな差をつけている。行動体力の全領域にその差がでている。

2-7 各条件からみた行動体力・活動意欲の検討

行動体力と活動意欲の特徴をみていくために、6つの条件を設定した。それについて検討する。

1) 毎日外あそびや運動をする者（G群）としない者（P群）の比較—運動の頻度条件から運動の頻度の条件の一つである「毎日する」群をえらびそれに関連する強度条件、他の頻度条件、時間の条件を対応させて、両群間の差をみた（個々の項目は省略）。

毎日運動するG群は、汗をいっぱいかくまで遊んだり運動したりする者、男64%、女44%、外あそびや運動を一緒にする友達が多く、男88%、女77%。衣服を汚すほど遊びや運動をする、男68%、

女34%。少しぐらいの怪我では外あそびをする、男46%、女29%。毎日からだを動かすのが好きで男97%、女95%。P群は、親が言わないと外で遊んだりしない者が、男42%、女32%を占める。

活動意欲との関係を見ると、G群はP群に比して、「将来スポーツ選手として活躍したい」希望、「友達と一緒にいろいろな遊びを考えだす」工夫、「外あそびを2時間以上つづける」持続力、「何とか出来そうな運動への」挑戦、「積極的な外あそびや運動をする」態度などに高い回答率を示している。しかし、「3Kmぐらいの距離をがんばって走る」などには、有意差がみられない。女子も男子と同傾向である。「3Kmのがんばり走」では、やはり差がみられず、実際の行動力というよりも希望、期待、理想に見立てられる項目に有意性がみとめられるのは、子供を直接的にみえない部分を、情報で推測しているにすぎないと考えられよう。

2) 汗をいっぱいかくまで外でのあそびや運動をする者(G)としない者(P)群の比較-運動の強度条件から

汗をいっぱいかくまで外でのあそびや運動をする者を運動強度の高い者と見立て、そうでない者と比較した。G群は、外あそびしてもつかれることがなく、全力を出す遊びや運動も充分にする男89%、女92%(G群)、男35%、女52%(P群)。遊びや運動をやり抜く力にもすぐれ、遊びや運動に熱中できる(G群男97、女96%、P群男45、女50%)。運動後の爽快感を味わうことが出来て、たくましさ(G群男69、女71%、P群男15、女17%)をかねそえているといえる。

外でのあそびや運動をしてもつかれるようなことのない者は、冒険的な行動を好み、好きな運動ならつかれていてもつづける持続力にすぐれ、友達と比較して運動をやり抜く体力もある(G群男80%、女52%、P群男53%、女30%)。全力を出してやる遊びや運動をし、少しぐらいの怪我を克服して運動をし、運動に熱中する。ただし、たくましさでは両群間に差はみられず、衣服を汚すほどの運動をするという項目にも差はない。「激しい運動でもやりなさいといわれればがんばる」「運動すると気持ちがいい」「体力をもてあましている」の項目には、男女ともに有意差はない。また、活動意欲との関係を見ると、有意差のみられた項目(男子女子共通)は、「少しぐらい怪我をしたり、身体の調子がわるくても外でのあそびや運動をやりたい」「がんばれば何とか出来そうな運動に挑戦する」「積極的に外でのあそびや運動をする」の三項目である。

冒険的な遊びを好んでする者(G群)としない者(P群)とを比較すると、行動体力の中から、選んだ17項目全てに有意差がみられた(男子)。女子も同様であり、冒険を好む児童は、行動体力のかかなりの領域にすぐれているといえよう。活動意欲の中からえらんだ17項目中男女ともに全項目に有意差がみられ、この領域でも有効な条件になる。

3) 外での遊びや運動を2時間以上つづける者(G群)とそうでない者(P群)の比較-運動の時間的条件から

行動体力に関する領域から、27項目をえらびG群とP群間の差を検定した。G群即ち2時間以上つづける者は、行動体力の大部分の項目で男女共にP群と著しい差をもち、児童にとって、2時間以上の運動が有用であると推察される。有意差が男女ともにみとめられなかった項目には、「スポーツ教室、スポーツ少年団に入っている」の項目だけである。この項は、全体的にも参加している児童が少なく、差がでないのは当然といえる。

活動意欲の領域から18項目をえらび、G・P群を比較すると、2時間以上つづけて運動をする者は、「体力をつけたいと思っている」「自分の技を友達にみせたいと両親に話す」の二項目には、

男女ともに有意差はみとめられない。学校の体育の時間のある日は、うきうきし、友達といろいろの遊びを工夫し、積極的に外での遊びや運動をする。学校の体育の時間があってもうきうきしない者は、G群男11%、女12%、P群男21%、女43%あり、P群の女子の率がきわめて高く、女子に特に、心がうきうきするような方策を見出さねばならない。

4) 学校の体育の時間がある日は心がうきうきする者（G群）としない者（P群）の比較—運動の体育的条件から

G群は、家で静かにしているよりは運動することを好み、毎日身体を動かす。外でのあそびは生活の一部になり、外あそびや運動に熱中できる者が90%以上の高率を示す。また、P群に比して、難かしい技を身につけるために努力し、よくできる得意技、得意な遊びや運動を身につけ、運動を学校体育の場に生かす基本的条件はかねそなえているといえる。

活動意欲については、G群は、運動やスポーツをやってみたい、運動ができない時努力して立ち直ろうとする、積極的に外での遊びや運動をする者が男女ともに多い。特に男子では、将来スポーツ選手として活躍したい、家に帰ると必ず外あそびや運動をしたいという者が、女子では自分の苦手な外あそびや運動をやりとげようとする、両親に好きな運動について話しをきいたりすることがあるという者が、P群より有意に多い。運動課題の遂行・達成、運動の実践力、困難・失敗の克服意欲がG群に旺盛である傾向がみられる。

5) 外での遊びや運動の技にすぐれている者（G群）とすぐれていない者（P群）の比較—運動の技能条件から

G群は、運動会などでよい成績をとったことがある、男82、女91%、得意の外での遊びや運動を一つは身につけている、男96、女96%。外あそびや運動をやり抜く体力は友達よりすぐれている。難かしい運動の技を身につけるために努力する。よく出来る得意技をもっている、たくましさがある、毎日夢中になって遊ぶ（男女とも95%以上）などに高い回答率を示している。

活動意欲の領域においても、将来スポーツ選手として活躍したい、ひとつの運動が出来ないとき努力して立ち直ろうとする、苦手な外あそびや運動をやりとげようとする、なかなか出来ない運動でも自分でやろうとする。難かしい運動や遊びの技を覚えるまでやるなどの各項目でP群を大幅に上回り、母親が、がんばりやさんと認める率も高い。

6) 外あそびや運動を一緒にする友達がたくさんいる者（G群）と少ない者（P群）の比較—運動の仲間条件から

G群では、毎日遊ぶ友達が多く、家で静かにしているよりは外あそびや運動することを好み、遊びや運動に熱中する者が高い率（約90%）を示している。衣服を汚すほど遊びや運動をするという者は、G群にP群の3倍多く、上級生や下級生と一緒に遊ぶ者もG群に著しく多い。

男女ともに、G群では、近所の子供達と一緒に外あそびや運動をしたいという強い意欲をもち、積極的に外あそびや運動をし、友達と一緒にいろいろな遊びを工夫して遊んでいる者が多い傾向にある。

また、遊びや運動でいつもリーダーになる者は、運動をやり抜く体力が友達よりすぐれ、運動の技もまたすぐれている。全力を出してやる遊びや運動をし、冒険的な運動を好み、たくましさがあり、よく出来る得意技をもっている（男77、女67%）。とくに、得意な外あそびや運動を少くとも一つは身につけており（男94、女83%）、リーダーになる条件が設定されている。また、活動意欲

の側面から検討すると、男子では、スポーツ選手として活躍したい、体力や技を少しづつ身につける努力をしたい。運動をやってみたい、両親に好きな運動について、話を聞いたりする。自分の苦手な運動をやりとげようとする、ひとつの運動ができないとき、努力して立ち直ろうとするなどに高い回答率を得ている（G群）。女子では、少しぐらいの怪我をしたり、体の調子がわるくても、外あそびや運動はやりたい、運動は自分のやり方でやる、苦手な運動をやりとげようとする、必ず外あそびや運動をする、自分の技を友達にみせたい、運動で注目されたい、積極的に外での遊びや運動をしたいなどに高い回答率を示した。

体力をつけたいという強い意欲は、男子だけにG・P群で差がみられ、リーダーの条件、とくに男子では、体力のあるなし、もしくは、体力をつける意欲もその条件になる。

お わ り に

我々はこれまで、健康状況、行動体力、活動意欲にかかわる諸項目と種々の条件をクロスしていくつかの検討をしてきた。これらの検討の結果をもとに、低学年の児童を良い体育指導に導くための基本的な課題を次のように設定した。

- 1 学校での体育学習を効率よく、しかも児童にとって効果的な体育活動になるためには、健康状況、行動体力、活動意欲などの正確な把握が必要である。これらの情報を学校 ↔ 家庭お互いにフィード・バックさせ、情報の質量をふやし、高めていかなければならない。
- 2 児童をとりまく「家庭能力」が高く評価されなければならない。
児童の健康状況、行動体力、活動意欲、運動技能、態度などの質の高さは、家族や友人関係に影響を受けることが大であり、とりわけ、基本的な生活習慣の形成や承認、賞讃、叱責、楽しさ、創造、表現、話し合いなどの家庭内での家族とのコミュニケーションにかかわる問題が重要である。このことがスムーズに行われれば、大きな「家庭能力」になりうるし、児童の運動的諸能力を高め、体育学習の原動力としての基礎的部分に位置づけられる。
- 3 学校 ↔ 家庭のフィード・バックが確かなものとして作用するためには、児童の持つ情報は、個別的、個性的になるべきである。
- 4 放課後の子供の生活圏が家庭内にとどまらず、広い空間と施設を支配、共用することの必要から、体育の時間の宿題の再学習、訓練の場が身近かにあることがよい。なお、環境としての施設、用具、話し相手・実施相手（友達・両親など）が在ることがのぞましい。それには、学校の校庭が現在とはことなる視点で検討されなければならないと考える。
- 5 内山による「遊び・運動行動の成立要因・条件に関する概念図式」は、有効であり、学校に於ける体育指導がこの観点からなされるとただ単なる実技指導にならないのは、本研究での結果からもうかがえる。
- 6 学校体育の中で、児童の健康状況、行動体力、活動意欲を正確に把握し、一時間の授業に、週計画、学年、更に学校段階で使われるに足る資料とする方法論と整理をすべきである。
そのために、授業者は、自分の諸能力を高めることが必要となる。
- 7 健康という視点、体力という視点、意欲という視点、環境という視点などそれぞれの視点で

授業を構成する場合、それらの視点の基本部分は同様であるが、ことなる内容、指導がなされる。それら多くの視点で基本部分と整合させながら内容の選択、展開の方向がきめられるのがよく、同一視点のみでの学習は、さけるべきである。また、児童それぞれの個性に合わせた、個別的な指導はさけて通れない。

注

- 1) 松浦義行, 芳賀脩光, 野田洋平他13名 『運動医事健康増進相談事業報告書（学校保健の手引第16集）』（茨城県学校保健会 1983）pp. 9-74 .
- 2) 高橋徹二, 大沢清二, 野田洋平他3名 『子どもの健康』（茨城県教育委員会 1984）pp. 1-77.
- 3) 内山源 『健康のための生活管理』（家政教育社 1982）p. 32.
- 4) 正木健雄, 野口三千三 『子どものからだは触まれている』（柏樹社 1979）pp. 10-37.
- 5) 同書 pp. 10-37.
- 6) 『昭和59年度 体力・運動能力調査報告書』（文部省体育局 1985）pp. 13-42.
- 7) 高橋, 大沢, 野田他 前掲書 pp. 51-77.